

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02630

研究課題名（和文）イエズス会演劇におけるエンブレムの機能に関する研究

研究課題名（英文）Studies on the functions of emblems in the theater of the Jesuit Colleges  
(XVI-XVII centuries)

研究代表者

千川 哲生（CHIKAWA, TETSUO）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：50587251

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、16～17世紀のフランスおよびイタリアのイエズス会演劇とエンブレム芸術の関係の解明を目的とする。演劇とエンブレムはいずれもイエズス会中等教育課程に取り入れられていたため、教師が手掛けた戯曲において、エンブレム・ブックから援用が行われることがあった。エンブレムは教育的観点から望ましい宗教的、道徳的格言を作り出し、さらに、エンブレムが前提とする、事物を比喩的に関連づけて解釈する態度は戯曲の多様な解釈を可能としている。フランスのラ・フレッシュ学院およびイタリアのローマ学院で創作、上演されたいくつかの演劇作品を手掛かりとして、以上のありさまを具体的に示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イエズス会中等教育におけるエンブレムと演劇はいずれも、文学や歴史、美術史などの分野において研究が行われてきたが、両者の具体的な関係についてはさほど研究が進んでいなかった。そのため本研究では、フランスとイタリアのイエズス会学校におけるイエズス会士が手掛けた戯曲におけるエンブレムの役割に着目した。演劇とエンブレムは中等教育の枠組みに等しく位置づけられていたために相互に関連づけられていたことを、戯曲の分析を通して具体的に分析することができた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to explore the relationship between Jesuit theater and emblematic art during the 16th and 17th centuries in France and Italy. In Jesuit colleges, both theater and emblems were integrated into the secondary school curriculum for the rhetoric class. This integration allowed rhetoric teachers to make use of emblem books, incorporating emblematic images as religious and moral aphorisms in their plays. Additionally, the metaphorical worldview depicted in emblem books helped to guide moral and religious interpretations of the plays. We have attempted to demonstrate this through the analysis of several plays performed at Jesuit colleges in La Fleche (France) and Rome.

研究分野：フランス文学

キーワード：イエズス会 エンブレム 演劇

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は17世紀フランスのイエズス会演劇に関するこれまでの研究を踏まえて、エンブレム・ブックのモットーや図版が戯曲に援用されていることに着目するに至った。エンブレムとは、格言的なモットー、図像、図像を解説するエピグラムの三点から構成される芸術であり、道徳的、宗教的真理を直観的な形式で表す。多様なエンブレムを収録したエンブレム・ブックが16世紀半ばにイタリアで出版されると、イエズス会は各地に設立した学院の教育プログラムでエンブレムの創作と解説を取り上げるに至った。並行してイエズス会は、祝祭や新年度開始の時期に劇を上演する慣習を確立した。

演劇とエンブレムがいずれもイメージと言葉から成り立つ芸術である以上、台本や舞台装置においてエンブレムが活用されたことは不思議ではない。イエズス会学校では、主にレトリック教師が台本の執筆と演出、エンブレムの創作と解説を手掛けていた。イエズス会士が創作した優れた戯曲やエンブレム・ブックが公刊されることもあった。そのため、イエズス会の学校演劇は、同時代のヨーロッパの世俗演劇に劣らずエンブレムと親和性が高かったことが推測できる。

英国のエリザベス朝演劇やスペインの黄金世紀演劇など、同時代の世俗演劇におけるエンブレムの利用やその役割に関する先行研究は充実している。しかし、ヨーロッパ各地に設立されたイエズス会経営の学院において上演されていた演劇がエンブレムとどのようなかわりを有していたのかという問いは、これまでほとんど立てられておらず、したがって調査も進んでいない。カルデロンやコルネイユをはじめ、16～17世紀にかけてヨーロッパで隆盛した世俗演劇の担い手たちの多くがイエズス会学校の出身者であることを思えば、この問いに答えることは、演劇史におけるイエズス会演劇を適切に位置づけるために必要だと考えられる。

## 2. 研究の目的

イエズス会演劇は、ルネサンス以降ヨーロッパ各国で世俗演劇が隆盛した理由を探る上で比較対象として重要な手がかりとなる。イエズス会演劇は中等教育において宗教的、道徳的な制約を課せられていたため、その審美的価値が顧みられることは少ない。しかし、ヨーロッパ中にイエズス会学院が創設されたために、イエズス会演劇は各国の俗語演劇と関係が深く、さらには、教育の枠組みに位置づけられていたために他の芸術学問が参照されることも多く、したがって、その審美的、歴史的価値は研究に値する。

そこで本研究は、イエズス会演劇におけるエンブレム芸術の利用の実態を個々の文献の検討を通して証明することを目的とする。ヨーロッパ各地の学校で創作、上演された演劇は、原則としてラテン語で執筆、上演され、さらに写本の流通のおかげでゆるやかながら一体性を保持していた一方で、教育目的を達成し、生徒たちの関心を得るために、エンブレムをはじめとする音楽やバレエなどほかの芸術を取り込み、イエズス会士たちの神学や哲学などの著作を参照しながら創作されることで多様性を有していた。このようなイエズス会演劇の越境的な性質を具体的に示すためには、当時の文脈に置きなおす文献学的作業が欠かせない。この作業を通して、イエズス会演劇が多様な学問芸術との交点を形成していた事実の一端を示し、ひいては、イエズス会演劇が教育史上の重要資料であるだけでなく、審美的価値を有していたことを示すことができる。

本研究では具体的に、16～17世紀のフランスおよびイタリアのイエズス会演劇とエンブレム芸術の関係の解明を目指す。演劇とエンブレムはいずれもイエズス会中等教育のレトリック課程に取り入れられていたので、レトリック教師が手掛けた戯曲において、エンブレム・ブックから援用されたエンブレムのエピグラムが宗教的、道徳的格言として用いられた。さらには、エンブレムが前提としている事物を比喩的に解釈する態度は、エンブレムのイメージが戯曲のさまざまな解釈を生み出すことを可能にしている。フランスのラ・フレーシュ学院およびイタリアのローマ学院で上演されたいくつかの戯曲台本を手掛かりとして、以上のありさまを具体的に示していく。

## 3. 研究の方法

本研究では、17世紀のフランス、イタリアのイエズス会演劇におけるエンブレムの実態について、(1)理論的考察 (2)エンブレムの説得機能、象徴機能 (3)舞台装置とエンブレムの三点に分けて、具体的な作品分析を通して解明を試みる。

### (1)理論的考察

イエズス会は誕生してまもなく、16世紀半ばごろから、ヨーロッパ各地に中等教育機関を設立しはじめた。同時代に誕生し、発展したエンブレム芸術はすぐさまイエズス会の学校教育課程に取り入れられるに至った。しかし、いまだその定義が定まっていなかったため、教育目的との合致や演劇との類似点などジャンルに関する問いに加え、台本や舞台にどのように取り入れるのか、という実践に関する問いが生じた。イエズス会士の中でも、ニコラ・コーサン、エマヌエーレ・テザウロ、ヤーコブ・マーゼンは、それぞれ演劇とエンブレムに関する体系的な考察を展開しただけでなく、劇作も手掛けているため、これらの問いに対して何らかの答えを出していると考えられる。演劇とエンブレムを巡る彼らの考察を明らかにすることで、次の研究段階(2)の土台とする。

#### (2) エンブレムの説得機能と象徴機能

エンブレム・ブックから戯曲に取り入れられたエンブレムが、作品の意味を方向付ける役割を果たしていることを、個々の戯曲に即して説得機能と象徴機能に着目しながら検証する。エンブレムのイメージとモットーは、比喩的な描写を伴った格言として、劇の独白で利用されることがあった。この場合エンブレムは修辞学の技法として説得的な効果を持ち、作品の道徳的、宗教的目的に貢献することになる。また、エンブレム・ブックから比喩的な描写が借用されることもあった。エンブレム・ブックは、自然界の事物や擬人化された抽象概念のカタログであるとともに、かけ離れた事物を結びつけ、背後に潜む摂理を原理として、世界を比喩的に読みとく訓練の手引書でもあった。そのため、エンブレムのイメージは劇中の事件や人物を何らかの象徴に見立てることを可能にするだけでなく、作品全体の解釈の幅を広げることになる。このように演劇におけるエンブレムは、レトリック的な説得機能と詩的な象徴機能を有しており、世界観の提示に寄与していたと考えられる。これらの機能を、イエズス会士が手掛けた劇作品を分析することで解明する。

#### (3) 舞台装置とエンブレム

イエズス会古文書館に残されている各学院での上演記録を調査し、舞台におけるエンブレムのイメージの活用の実態を探る。詳細な上演記録はあまり残っていないが、その中には、たとえば間奏曲の舞台衣装や舞台装置の装飾にエンブレムが用いられていたことが推測できる記述がある。また、祝祭において、行列の山車や仮設舞台の象徴的な装飾がやはりエンブレムを参照していたと思われる事例がある。フランスのラ・フレーション学院やローマ学院における上演記録を調査して、エンブレムが戯曲のみならず祝祭のテーマと関連して用いられていた可能性を論じる。

### 4. 研究成果

2017年、2022年に開催された国際エンブレム学会においてそれぞれ口頭発表を行った。

#### (1) « De l'emblème à la tragédie : un cas d'interdisciplinarité chez Nicolas Caussin »

本発表においては、フランスのラ・フレーション学院で修辞学教師を17世紀初頭に務めたニコラ・コーサンの演劇におけるエンブレムの利用に着目した。コーサンは悲劇集とエンブレム・ブックの双方を公刊しており、演劇とエンブレムの関連を研究する上で貴重な実例を提供している。コーサンは戯曲に教訓的側面を与えるために、自身のエンブレム・ブックからいくつか例を借用しただけでなく、事物の比喩的な解釈を通して、見えない神の摂理を探究する訓練として劇を創作したことを示した。

#### (2) « La Danse comme emblème : les pensées et créations chorégraphiques de Leone Santi, S.J. »

本発表においては、ローマ学院の教師であったレオーネ・サンティが、エンブレムをイメージと言葉から構成されたしるしとして捉えて、ダンスを神の摂理を探求するためのエンブレムになぞらえていることに着目した。ダンスの円運動の起源を惑星の運行の模倣に求めるのはプラトン以降の伝統的な解釈だが、サンティはこの解釈を自分の戯曲や歌詞を書いた間奏曲に取り入れ、摂理の探求を説いてみせた。しかし16世紀から17世紀にかけてはガリレオらによる天文学上の諸発見が相次ぎ、惑星の運行の背後に摂理を見出す天動説がぐらついた時代である。同時代の天文学の進展がダンス＝エンブレム観に及ぼした影響について考察した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Tetsuo CHIKAWA
2. 発表標題 De l'homme de bien a l'homme galant : le heros cornelien face aux honnetes gens
3. 学会等名 48e Congres de la North American Society for Seventeenth Century French Literature (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tetsuo CHIKAWA
2. 発表標題 De l'embleme a la tragedie : un cas d'interdisciplinarite chez Nicolas Caussin
3. 学会等名 11e congres international de la Society for Emblem Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tetsuo CHIKAWA
2. 発表標題 La Danse comme embleme: les pensees et creations choregraphiques de Leone Santi, S.J.
3. 学会等名 12 th International Conference of the Society For Emblem Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 編者Marcella Leopizzi (千川哲生ほか共同執筆者30名)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Narr Francke Attempto Verlag	5. 総ページ数 476
3. 書名 L'honnetete au Grand Siecle : belles manieres et Belles Lettres	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------